

オンライン「おうち楽しみプロジェクト」 岐阜大学大学院教育学研究科 平澤紀子

岐阜大学教育学部附属特別支援教育センターでは、親の会と協働して、「ペアレントサポートプログラム」を実施している。これは、保護者が前向きな子育てを行えるように、応用行動分析学からお子さんの行動の理解や支援を学ぶ学習会である。ただし、今般のコロナ禍において、例年のような大学でのプログラムは実施できない。一方、外部とのつながりが遮断される中で、保護者はいつも以上にお子さんの生活を支えようと大変な思いをしている。そこで、保護者に少しでも情報を提供し、日々の支えになれるように、オンラインの「おうち楽しみプロジェクト」を試みた。これは、Zoomによる学習会と学生サポーターによるLINE（ライン）を用いた支援を合わせたものである。本報では、その概要について紹介する。

1 対象

発達障害のお子さんと保護者 10 名

これまでにペアレントサポートプログラムに参加し、応用行動分析学の基礎的知識を学習した方で、本プロジェクトの趣旨、方法、個人情報保護、結果のまとめを文書で説明し、協力の同意を得た方である。

2 時期

学習会は令和2年5月～9月、月1回（計5回）

ラインを用いた支援は5月～9月の間は毎日、10月以降は週1回から徐々に減らした。

2月にフォローアップ学習会。このスケジュールは事前に説明しておいた。

3 方法

(1) Zoom による学習会

お子さんの楽しみや頑張りを支えるための楽しみの計画の作り方と、それを通じてお子さんに願う行動をどのように支援するかを解説した。

< 楽しみの計画 >

- ・朝に、お子さんと相談し、お子さんがやりたいこと、がんばりたい行動を決める。
- ・夕方に、お子さんが取り組みを振り返り、評価する。
- ・お子さんが学生に報告する。

< 楽しみの計画を通じてお子さんに願う行動の支援 >

- ・お子さんに願う行動を具体化する。
- ・お子さんが願う行動をしやすいABCを考える。
- ・お子さんの行動を記録する。
- ・お子さんの行動の記録から、よりよい工夫を考える。

(2) 学生サポーターによるお子さんとのライン

お子さんの取り組みを支えるために、学生がラインでお子さんやりとりをした。

- ・ 学生がお子さんに自己紹介のビデオを送る。
- ・ 学生がお子さんに取り組みを尋ねるラインを夕方にする。
- ・ お子さんが学生に取り組みを報告し、学生がコメントを返す。
- ・ 1週間毎に、学生がお子さんの頑張りを視覚化し、コメントを送る。

4 支援の実際

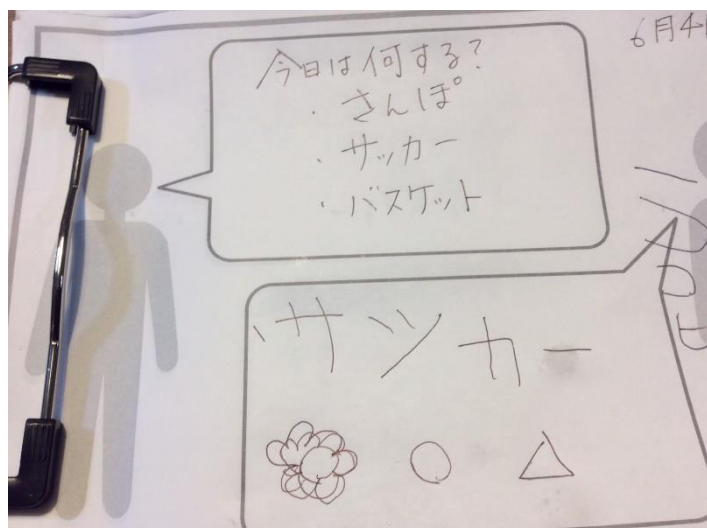
公開の許可を得たAさんの事例を紹介する。

Aさんは、自閉症の診断を有する、特別支援学校高等部3年生であった。言葉は話せないが、身振りやカード、iPadを用いて物や活動の要求を伝えることができた。保護者の願いは、「余暇を増やして楽しみのある生活を送って欲しい」、「学校でのコミュニケーション指導を踏まえて、他者と交流し自分の頑張りを伝えて認められる喜びを感じて欲しい」ことであった。今回のプロジェクトで、保護者は、お子さんとの楽しみの計画をつくる際に、次の2つの行動を目標として取り組むことにした。

- ①朝に、お子さんが楽しみの計画をつくる時に、自分でやりたいことを決める。
- ②夕方に、その取り組みを学生に伝えるための相談をする。

(1) お子さんと楽しみの計画をつくる

学習会では、「お子さんがやりたいことを決める」ために、どのような楽しみの計画表がよいか、どのようなフィードバックが分かりやすいかをABCから検討し、次のようなイラストシートに記入することにした。



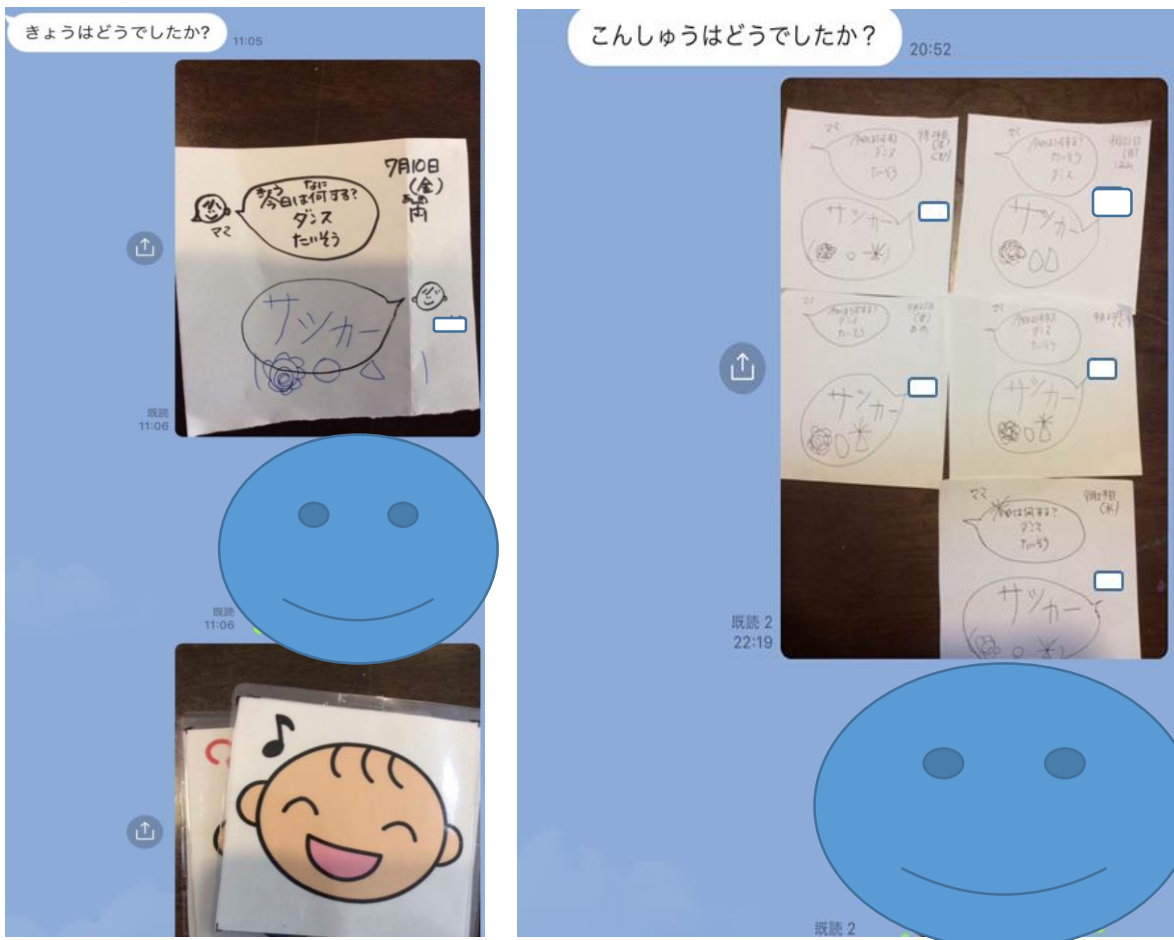
イラストシートには、文字で選択肢を提示し、お子さんが自分で決めたら「えらいね」と褒めることにした。そして、お子さんは自分の取り組みを3件法（花丸：やりたいことができて楽しかった ○：やりたいことができた △：やらなかった）で評価し、保護者が見届けることにした。

イラストシートは株式会社おめめどう「@おめめどうコミュメモ帳®」を使用した。

(2) 学生とのライン

左：毎日の夕方に、学生が今日の取り組みを尋ね、お子さんの報告に学生がコメントやスタンプを返した。

右：金曜の夕方に、学生が1週間の取り組みを尋ね、お子さんの報告にスタンプやコメントを返した。

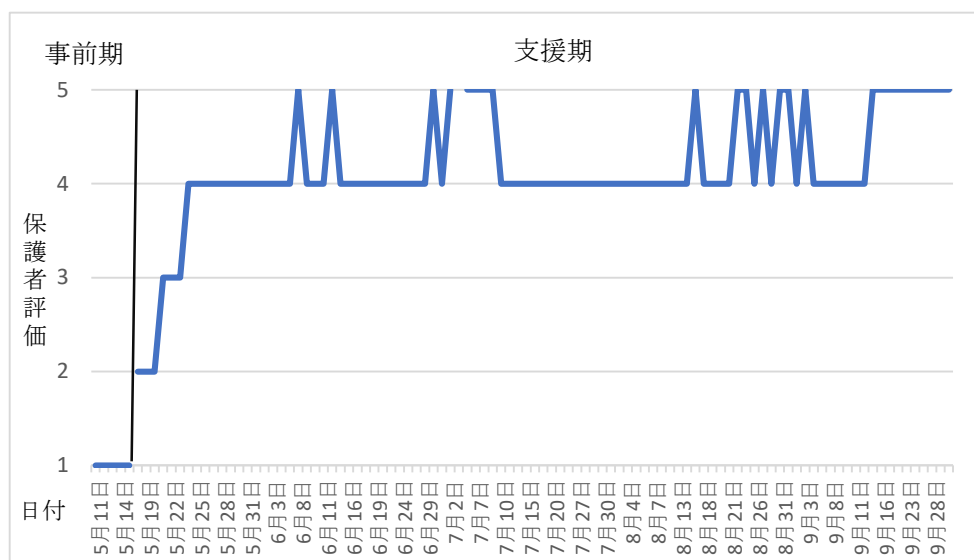


スタンプは使用した原本ではなく、公開用に新たに図を貼り付けた。

参考 株式会社おめめどう「@おめめどうコミュメモ帳®」

(3) 保護者による行動の記録と工夫

保護者は「お子さんが決める行動」を記録し、学習会で記録を検討しながら、どんな工夫がよいか考えた。お子さんが楽しみを決めるのに、アプリで活動を提示するとより決めやすい、取り組みの結果をお子さんが自己評価するのに表情カードを使うとよいなど、かかわり方を変えていった。



(5 : 選択肢以外から2つ以上書いた 4 : 選択肢以外から1つ書いた 3 : 選択肢から書いた 2 : 促しで選択肢から書いた 1 : しなかった)

5 事後アンケート

「おうち楽しみプロジェクト」がお子さんの生活を支えるのに役立ったかについては4件法(とても役だった、役だった、あまり役立たなかった、役立たなかった)のうち、「とても役だった」が80%であった。その理由には、お子さんの生活リズムが整い、親子のかわりが良いものになったことが挙げられた。自由記述では、「子どもと相談する中で、子どもが決めて、取り組みを振り返ることで、子どもが思いの外よく考えていることが分かった」「スタンプや画像による学生のコメントが楽しみとなり、活動に取り組めた」「子どもが楽しく取り組むことで、自分に余裕がもてた」ことが指摘された。お子さんが「やりたいこと」「がんばりたいこと」を決めて、取り組み、その取り組みを他者に伝え、他者がフィードバックすることが、お子さんの生活を支え、お子さんが楽しく取り組む姿を見るのが保護者を支える一助になったようである。オンライン学習会の可能性を教えていただいた。

謝辞

楽しみの計画表やラインの公表は同意を得たものです。ご協力をいただいたお子さんと保護者に感謝します。学生サポーターの佐々木祐奈さん、杉浦日向太さん、中村日乃さんの協力に感謝します。事例は卒業論文にまとめました。

文献

平澤紀子(2015)発達障害児の保護者を対象としたPBSに基づく学習会の評価. 岐阜大学教育学部研究報告, 人文科学 64(1), 135-141.